INTERVIEW
404人目
下

千人回峰

心に響く人生の匠たち

「千人回峰」というタイトルは、比叡山の峰々を千日かけて駆け巡り、悟りを開く天台宗の荒行「千日回峰」から拝借したものです。千人の方々とお会いして、その哲学・行動の深淵に触れたいと願い、この連載を続けています。

中瀬幸子
Sachiko Nakase
Avintonジャパン
代表取締役

これからは、顧客が言語化できない「欲求」を「要件」にするスキルが求められる

中瀬さんは、定期的に顧客と割り勘で飲み会や食事会をして話すことがあるそうだ。それだけ顧客との距離が近く、そうした場で率直な意見や要望を聞くことも多いという。そこで「どうして当社とお付き合いしてくださるのですか」と尋ねると「カジュアルだから」という答えが返ってきたそうだ。メッセージを入れるとすぐ動いてくれるのがいいと。「そういう便利な小道具みたいな存在でありたい」という言は、中小企業の一つのあるべき姿を示唆しているように感じた。（本紙主幹・奥田芳恵）

外国人エンジニアが多いことが差異化のかぎに

奥田　中瀬さんのAvintonジャパンは企業のDX支援を中心とするIT企業ですが、ご自身のコンピューターとの関わりは？

中瀬　プログラミングについては、大学で1単位取って挫折しました。だから、エンジニアはほかの人に任せて、自分は営業・マネジメントのほうで頑張っていこうと思いました。

奥田　創業当初、会社はどんな状況だったのでしょうか。

中瀬　当社は2010年の創業ですが、当時、ITエンジニアはまだまだ「3K」の環境にあり、人気業種とは言えない状況にありました。ましてやアパートの一室をオフィスにしているような名もない会社に、日本人エンジニアはなかなか来てくれなかったのです。そこで、当初は外国人エンジニアも積極的に募集し、それが結果的に強みの一つとなりました。

奥田　Avintonジャパンは、エンジニアの外国人比率が高いとうかがっていましたが、今はどのくらいですか。

中瀬　現在は全体の2割程度ですが、一時は外国人エンジニアが半数近くを占めたことがあります。外国人の高度人材も積極的に採用することで、日本人エンジニアだけでは実現できない高い技術を保持することができました。そして多国籍であるがゆえに、そうした会社のカラーに魅力を感じる若い日本人のエンジニアも集まってくるようになったのです。

奥田　結果的に、当初、日本人エンジニアが採用できなかったことが社員の多国籍化につながり、それにより差異化ができるようになったということですね。ところで、起業したとき、中瀬さんには勝算はありましたか。

中瀬　当時、iPhoneが世の中に出てきたばかりで、これからの携帯電話はスマートフォンが当たり前になって通信量が増えるとともに、ネットワークを効率化してそれを分析する仕事がどんどん増えていくと考えました。これは、自分にとって二度とないチャンスだと思ったのです。

正式な起業前にすでにチームは動いていましたが、せっかく集まってくれた優秀な外国人エンジニアにも成功してもらいたい。みんながコミットしたこの挑戦に乗らない手はないと思いましたね。

奥田　当時の中瀬さんたちの熱さが伝わってくるようです。

中瀬　08年にソフトバンクの孫正義さんが、日本におけるiPhoneの独占販売を実現したこともあり、実際にスマートフォンのデータ通信量が非常に増えたことが追い風になりました。

でも、創業の頃は売り上げが立たないとき、窓際で空に向かって本当にお祈りしたこともあったんです（笑）。でも、お祈りをしてもダメだと思い、せっせと見込み客に連絡をするようになりました。



第3種郵便物認可



PROFILE　1986年、富山県魚津市生まれ。大学卒業後、富士ゼロックス（現富士フイルムビジネスイノベーション）で法人営業に従事。2010年、Avintonジャパンをスタートし、AI・ビッグデータ・ITコンサルティングを通じて企業のDXを支援。これまで30カ国以上からの社員とともに事業を展開している。また、文部科学省「専修学校理系転換等推進事業」の推進委員を務めるほか、大学での講義や企業・自治体向けの講演・研修を通じて、AIとともに考え、学び続ける人材と組織の育成に取り組んでいる。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi
撮影／長谷川博一
photo by Hirokazu Hasegawa
2026.10.7／東京都千代田区のBCNにて

AIが苦手とする部分まで掘り下げることが大事

奥田　ところで、これまでの技術者は技術力さえ高ければ評価される側面があったと思いますが、AIが本格活用される時代になり、今後、どのような要素が求められると思われますか。

中瀬　これまでは、お客様の要望に沿って計算式をつくって、それをソフトウェアやハードウェアに落とし込めばよかったわけですが、そのプロセスは、お客様自身がAIに聞けばできてしまうわけです。

奥田　それだけなら、技術者がいらなくなってしまうと……。

中瀬　一言で言えば、お客様が言語化できていない「欲求」を「要件」にするためのスキルが、今すごく求められています。

奥田　表面的なリクエストの奥にある真意を探る必要があるのですね。

中瀬　例えば、私が「痩せたい」と言った場合、専門家は「このメニューの食事を摂って、このくらいの運動をして、何時間の睡眠を取るようにしてください」と答えるのでしょうが、それはAIに聞けばたちまち導き出される答えです。だから、「どうして痩せたいのですか」といった問いに対する反応や相手の表情などから、その先にある欲求を明らかにする必要があるわけです。すると、まったく違うところに課題が見つかったりします。そうした空気感や顔の表情の動きを読むことは、まだAIには難しいものがあります。

奥田　今後、AIもさらに進化していくのでしょうが、AIが苦手とする部分をカバーしていくことが大切になるのですね。

中瀬　これは技術者だけの問題にとどまらず、IT業界やコンサルティング業界に求められていることで、当社は以前からこの問題に取り組んできたため先行優位性はあると思っています。ただ、競合との技術的格差は縮小傾向にあるため、お客様とのコミュニケーションのあり方、例えばその人と話していて気持ちが良いか、といったことまでが自社が選ばれる条件に入ってくると考えています。

奥田　そこまで求められると、人材教育もなかなか大変ですね。

中瀬　どこまでできるか分かりませんが、その方向に向けてやっているところです。

奥田　現在は、どういったトレーニングや教育プログラムを実施されているのですか。

中瀬　まずは技術的な基礎ですね。基礎といってもプログラミングだけではなくて、サーバーやネットワークなどの「足腰」になる技術を身に付けてもらい、その上に乗るソフトウェア、その上のAIというように体系的な技術知識が必要なので、そうしたプログラムを10年以上前から実施しています。それと同時に年次別の研修を実施しており、例えば新入社員はうまくコミュニケーションを取れない人も多いため、リーダークラスがそこから教えて、早くお客様と折衝できるようにしています。

奥田　技術力だけでなく、総合的な人間力といったものも育てることが求められるのですね。ところで、中瀬さんは将来的にどんな方向に力を入れていかれるのでしょうか。

中瀬　ここ3年ほどは、会社経営だけでなく、全国の学校で授業をしたり、文部科学省のプロジェクトに参加するなど、活動の幅が広がっています。当社は、これまで500人以上のエンジニアを社会に送り出してきました。その中で培った人材育成の経験や教育プログラムを、社内だけにとどめるのはもったいないと思ったんです。そこで、全国の教育機関と連携する「Avinton Academy on Campus」を展開し、企業で求められる実践的な知識や技術を学校教育につなげています。

　一方、AIの進化によって、IT企業も技術を提供するだけでは価値を生み出し続けることが難しくなっています。だからこそ、社員にも技術分野にとどまらず、さまざまな業界や仕事を経験して視野を広げ、お客様と一緒に課題を発見し、新しいビジネスを創造できる人材に育ってほしいと考えています。

　私自身も、ITや教育、そのほかのさまざまな分野を行き来しながら、自社の経験や技術、パートナー企業の専門性を掛け合わせ、一社だけでは実現できなかった新しい価値を社会に届けることに挑戦していきたいですね。

奥田　今日は、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。これからもますますのご活躍、楽しみにしております。

こぼれ話



熱気高まる学生向けハッカソンの会場に、かわいらしい2人の子どもの手を引いて現れた審査員の中瀬幸子さん。学校や保育園がお休みの土日は、何かとやりくりが大変なもの。状況は良く分かる。幸い子どもたちが楽しく遊べるスペースもあり、中瀬さんは審査員の役目をしっかり果たされていた。ハッカソン終了後も学生たちの話に耳を傾け、起業に関する熱い思いなどに応えながら交流をしていたのが印象的だ。私も、学生たちの情熱から明日へのエネルギーを受け取り、疲れを心地よく感じた1日であった。

　ハッカソンのときに感じた熱さと同じように、対談でも仕事に対する情熱や社員に対する愛情がしっかりと伝わってきた。本文でも触れているとおり、Avintonジャパンは多くの外国人エンジニアを採用してこられた。それゆえ、仕事以外での悩みや困りごとなども多く、その際には中瀬さんが自ら積極的に相談に乗ったり、一緒に対応したりしてきたそうだ。

　中瀬さんを見ていると、サポートしなければと頭で考えるよりも先に、心と体が瞬時に動いているように感じる。むしろ、少しお節介くらいに思われてちょうど良いと思いながら、生活面に関することも区分けすることなくサポートしてきたのではないかと思える。

　Avintonジャパンでは、社員の実家がブドウの収穫で大変だと聞けば、手伝いに行くこともあるのだそう。1人で頑張れる人はいないから、協力して何かを成し遂げる体験はとても大切だと考えているようだ。社員には、「快適なオフィス、高度なマシンで仕事をしている環境を当たり前に思ってほしくない。自分に価値があるのではなく、業界に価値があるから仕事ができているとの気持ちも持ってほしい」と伝えている。一次産業に関わることや清掃のボランティアなどの体験を通して、人間教育にも力を入れているという。もちろん、そのあと遊んでリフレッシュして帰って来てもらっているそうだ。

　AIで効率化・高速化していく中、人間力を高めることも怠らず、むしろそこに時間を使うIT企業。人間臭く、人間らしく、Avintonジャパンらしい価値をより知らしめてほしいなと、中瀬さんへの期待が一層膨らんだ。

（奥田芳恵）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



「ものづくりの環」の詩

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人――
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN
http://www.bcn.co.jp/